

天正狂言本〈粟田口〉小考

— 狂言古画・大名そろへ —

田口和夫



国文学研究資料館蔵『狂言絵』イ十七(二次使用禁止)

狂言古画の演出

昨年(平27)十一月、國學院大學たまプラーザキャンパスで、山本家一門による第十八回狂言の会があった。毎回、演目にかかわって「狂言の昔と今」という話をしていく。今回、〈粟田口〉が出たので、天正狂言本を中心に検討したのだが、その時の話題から二つの問題をここで取り上げる。まず一つは狂言古画のことである。掲出した国文学研究資料館所蔵の狂言古画を用いたのだが、この古画は私が編集した『狂言七十番』(勉誠出版)にも用い、解説を加えている。その時は、「狂言画は粟田口の書き物を大名が読み上げ、すっぱがそれに合わせている場面です。太郎冠者の視線も大名と同じところに向いています」とだけ書いて、その後には付け加えるべき大切な言葉を失念していた。それは、「このような場面は現行の〈粟田口〉の演出には存在しません」ということである。

この狂言は〈末広がり〉のような買物狂言の類型に依っている。大名が粟田口を買いに太郎冠者を都にやる、という発端で、大名も

太郎冠者も粟田口が刀だということとは知らないという設定は江戸初期(大蔵流・虎明本、和泉流・天理本)から現在まで変わらない。また、太郎冠者は粟田口と名乗るすっぱにだまされて買いつめた後、同道して帰り着き、すっぱを門前に待たせて、主人に報告する。これは新参者を雇う大名狂言、例えば〈今参〉(文相撲)などと共通の演出である。それらでは主人が過を言ってから、すぐに呼び入れて対面の場となり、それぞれ独自の趣向に展開するのだが、〈粟田口〉では呼び入れず、主人とすっぱとの間を太郎冠者が取次いで、往復することになる。もつと複雑になれば二人袴のようにもなる形だが、これも江戸初期から現行まで変わらぬ演出である。この演出を取るかぎり、古画の形は成立しない。このような場がありうるのか、ここで天正狂言本を検討してみることになる。

天正狂言本〈粟田口〉の前半は次のように進行する。

一、大明出て人をよび出す。大明そろへがある。たからくらべせんとて、あわた口かひに都へのぼせる。さてのぼる。都につきて、あわた口かわつとよばゝる。又たらし一人出て、我が身をあわた口とてうる。萬びきにかふてくだる。

ここまで、後に論じる「大名そろへ」のことを除いて、現行と共通の筋立てである。

殿にかくとゆふ。ふるみか。は本。はどき本。めいを聞。こたゑる。めいづくしによく合。

この部分が古画と重なるところである。尋ねる内容は「古身、刃本、鏹元、銘」で、現行の「藤林・藤右馬」を尋ねる部分は無いが、刀に関することは、順序は違うが現行と全く同じである。どのように尋ねたかは一切記述されてはいない。現行のように太郎冠者が取次ぐのか、古画のように主人が直接に尋ねるのか、いずれとも考えられる。従来は、現行の舞台にひかれて、太郎冠者が取次いでいるけれども、それが表記されないのだと考えられていた。しかし、古画の生き生きとした描写を見ると、取次のない演出も成立可能であり、それが天正狂言本の演出なのだと考えられることができる。中世においては、刀は近世以降より身近な存在であり、一々復命して確認しなくても、観客には分かっていた筈である。取次は必要ではなく、テンポの速い演出だったのであろう。近世になって、取次の演出が導入される。その結果、尋ねる主人の側に余裕が生まれ、一々の答えに感想を差しさむことが出来、大名の人の良さが確認されることになる。大名のおおらかな人間性が造型される現行の演出に展開する要因と考えておきたい。

大名そろへ

「大明」は「大名」の宛字。明応五年本節用集では「大名」を「守護之儀、錢持之儀」とする。『時代別国語大辞典』が引く広本節用集は「大名ハ守護、大名ハ錢持」としているが、訓みによって意味が変わるのが一般的かどうか不

明である。ただ、粟田口の大名が実質「錢持」（金持ちの大地主）であることは確かであろう。この大名が言う「大名そろへ」は、全く同じ発端で、打出の小槌を買いにやる天正狂言本（たからかひ（宝買））にもあるので、「大名揃え」と「宝競べ」は密接に関わっていると考えられる。内容としては、大名たちが一堂に会して何かを競うことを指しているが、この語は他に見られない用語で、この言葉を立項する日本国語大辞典も用例は天正狂言本なのであった。

大名が一堂に会するということで連想されるのは能鉢木の後場である。最明寺時頼の命により「関東八州の大名小名ことごとく物の具をして、かまくらへ」（貞享松井本アイ）参集する。「上り集まる兵、煌星のごとく並み居」（鉢木）る風景は、「大名揃え」というにふさわしい。小山弘志氏「作品研究」鉢木』（観世）昭40・11は平家物語巻二「烽火之沙汰」の平重盛が「天下の大事」と称して一万余騎の兵を集め、周の幽王の故事を説いた記事を引き、（鉢木）における軍勢召集も「話である」とする。物語を面白くするためであったも、関八州の大名小名が勢揃いしていることに注目しよう。

「〇〇揃へ」という言葉で連想されるのは、信長公記巻十四、天正九年（一五八一）二月二十八日、信長が「五畿内隣国の大名・小名・御家人を召寄せられ、駿馬を集め、天下において御馬揃をなされ、聖王へ御覧に備へられ」という「御馬揃」である。

「馬揃」という幸若舞曲がある。源頼朝が平家打倒のため軍勢を集めたとき、面々の持つ名馬を御前に引かせ見た、という内容である。岩波新大系『舞の本』の解説によれば、これは天正九年の信長馬揃を「ふまえて作られ」たものという。日葡辞書にも立項され、「騎馬の軍勢を集めること。または、騎馬隊を編成すること。これはあまり用いられない語である」とする。一六〇三・〇四年に成立した日葡辞書は幸若舞曲の詞章も引用するが、ここではその引用注記もなく、信長の馬揃えの影響下にあるものと考ええる。「あまり用いられない語」からは幸若にあるという意識も感じられない。項目が「馬揃へ」なのに、「騎馬の軍勢を集めること」という説明は面白い。「馬揃へ」は名目であって、実質は軍勢召集の「大名揃へ」であったことを示しているからである。信長のそれも同じだったと考えられる。信長にとって天正九年はまだ安泰の年ではない。「大名揃へ」は反信長勢力を熾り出す手段にもなったのである。信長は、この発想を能（鉢木）に学んだのだと、私は考える。そして、この信長の盛儀が「大名揃へ」という形で記憶され、天正狂言本（粟田口）（宝買）に反映されている、と考えるのである。ただし、これが天正狂言本奥書の「天正六年七月吉日」という日時とどう関わるか、また考えることになる。

（文科大学名誉教授）